

この作品は、DeNA／バンダイナムコゲームス『アイドルマスター シンデレラガールズ』を題材にして書かれた二次創作作品です。

作中に示される表現・解釈は、著者独自のものであり、著作権社様とは一切、関係ありません。

「暑いですねえ……」

弱々しい声が、幸子の口から漏れる。

その頭上には、真夏の太陽が輝いている。

日陰にいても、ギラギラと音が聞こえてきそうなほどの陽射しを見せる。パラソルの下で休んでいるが、白い浜辺の照り返しを防ぐすべはない。

「幸子、飲むか？」

傍らに立つ彼女のプロデューサーが、ペットボトルを差し出す。

「ふふーん、ひよつとして間接キスですね？」

「……そんなわけあるか」

「本当はして欲しいんですけどね？ 後でボクの飲みかけをあげますから、我慢して下さいね」

「はいはい、ありがたくもらうことにするから、ちゃんと水分は補給しておこうな。体調を崩さないように」

「分かっていますよ、迷惑をかける訳にはいかないですからね」

言いながら、幸子は蓋を開けて、スポーツドリンクに口をつける。

冷たい喉越しが心地よく、すっと汗が引いていく。

「そうだな。随分と迷惑をかけてしまったからなあ」

プロデューサーの言葉に、幸子は「はい」とだけ頷く。

二人の視線の先には、炎天下で撮影の準備をするスタッフの姿がある。

「幸子、もう、大丈夫か？」

「あつたり前じゃないですか。このボクを誰だと思ってるんですか？」

「君は、幸子だよ。売れっ子で、自信家で、とてもカワイイ興水幸子だ」

「ふふーん、もっと誉めてもいいんですよ」

おだてられた幸子が胸を張る。

「でもな」

プロデューサーはそんな幸子を見つめ、ふと笑うと、

「強がりで、本当は泣き虫で、繊細な14歳の女の子。それも幸子だよ」

「な、なにを言ってるんですか」

真夏の暑い陽射しの太陽を、パラソルの下で避けているのに、幸子の顔が赤くなる。

「次のお仕事はグラビアですか！」

「幸子が、事務所で歓声を上げる。」

興水幸子——彼女は現在、ブレイクしつつある中学生アイドルだ。

「ふふーん、カワイイボクの魅力がさらに大勢の人に知れ渡るんですね！」

無邪気に喜ぶ彼女と対照的に、プロデューサーの顔は冴えない。

「それなんだが……ちよつと、な」

彼は幸子の才能を見抜き、デビュー当時からずっと支えてきた。幸子の信頼は厚い。

その彼の表情を見て、幸子は首を捻^{ひね}る。

「いつたい、なんなんですか？」

「幸子が嫌なら、断つても構わない話なんだが……」

「どうして、ボクが断るんですか？ 前の、あのお嬢様風の真つ白なワンピース、とても良かったじゃないですか。」

あの時のグラビアには、ボクのカワイイさが詰まっていますよ

「確かに、あれは良かったな。幸子の人気が出始めたのも、あの頃からか」

ふと懐かしい顔になって、プロデューサーが笑みを浮かべる。

「ただ、その後、少し方向性が変わってきたような気がします……」

スカイダイビングさせられたり、ウォータースライダーさせられたり、とバラエティ方面の仕事も増えてきている。

「それも含めて、幸子の魅力つてことだろう」

フオローする彼の台詞に「その通りですよね」と、幸子も頷く。

「そもそも、仕事を持ってきたのはプロデューサーさんですよ。ね。だったら、今回のグラビアのお仕事はなにをためらうことがあるんですか？」

「うーん、それなんだがなあ」

煮え切らない態度のプロデューサーに、幸子は膝を詰めて近づく。

「もう、ハッキリして下さい！」

「悪い、悪い。その、先方の要望が水着なんだよ。ほら、幸子も知ってるだろう？ 漫画雑誌で……」

そう言つて、彼は青少年向けの漫画週刊誌の名前を上げる。旬のアイドル達が巻頭グラビアを飾り、そこからさらに羽ばたいていく者も少なくない。

「正直、僕は気が乗らないんだ。幸子にはまだ早いと思っ
ている」

「早い、ですか？」

やや硬い声で、幸子が聞き返す。

「それは、どういう意味で早いですか？ まさか、ボク
の魅力的なボディの成長が、やや遅れ気味だという意味で
はありませんよね？」

「いや、うん、それは、まあ、そう、かな？」

「プ、プロデューサーさんはこのボクの魅力的なボディの
成長が、やや遅れ気味だつて言うんですかー」

「いま、自分でそのまま言ったんじゃないか……」

「た、確かに心の中ではひよつとしたら、ボクの胸は14歳
としても、ややカワイらしいというか、平均的な中学生と
しても控えめかも知れないというか、まだまだこれから大
きくなる余地があるんじゃないかなあ、つて思ってたんで
すけど」

「そう言えば、ナターリアも同じ14歳だったよな」

プロデューサーの一言が、火に油を注ぐ。

「ナ、ナターリアさんと比べるのは、卑怯です！ 彼女は、
その、外国育ちなので特別です！」

「あの体はちよつとばかり、反則だよなあ」

「つて、プロデューサーさんは何を言ってるんですか！
これははじめです！ セクハラです！」

「いや、すまん、そういうつもりじゃなくて、だな」

幸子の剣幕にたじたじになってしまふ。

「もう良いです！ 分かりました。そんな風に言うなら、
そのお仕事はやりません、やらなきゃいいんですよね！
それが、プロデューサーさんの望みなんですよね！ もつ
と胸の大きな子がやればいいじゃないですか！ ナターリ
アさんとか……ふんっ」

大きな声で言うが早いのか、

「じゃあ、お話は終わりですね。ボクは宿題があるので帰
ります！」

そう言い残して、幸子はさっさと事務所から出て行って
しまった。

「……止める暇もなかったな」

やれやれ、と残されたプロデューサーがため息をつく。

「追いかけてなくていいんですか？」

そう声を掛けるのは、事務所の中でずっとやり取りを聞
いていた千川ちひろだ。総務、経理から雑務全般を取り仕
切り、影の社長と恐れられる彼女がにこやかに、尋ねる。

「ひと晩経てば、頭も冷えるでしょう。この後、他の打ち合わせがあるので、出かける訳にはいきませんし」

「幸子ちゃんも、思い込みが激しい時がありますからね。困りましたね」

「それが、あいつの良いところでもあるんですけどね。自信に繋がっていますから」

「あらあら、やつぱりプロデューサーさんは、ひとりひとり良く見えていますね」

「それが仕事ですから」

「あら、お仕事だけですか？」

「……当たり前じゃないですか」

ぼそり、と呟いたプロデューサーに、

「さっきの幸子ちゃんに『まだ早い』って言ったのは、体つきのことじゃないですよね？」

ちひろが、にこりと笑う。

「ちゃんと、幸子ちゃんも分かってくれますよ」

「……だと良いんですけど。夜になったら、電話しておきます」

「まったく、もう！ プロデューサーさんと来たら、ほんとに、もう！」

家に帰って、夕食が済み、机に向かっても、幸子の腹立ちは収まらない。

「今度ばかりは、謝つてきても許してあげませんからね！」

お腹が膨れても、乙女の怒りは続いているのだった。

「そりゃ、ボクはちっちゃいですよ。その、色々……」

そう呟いて、幸子は自室のパソコンの電源を入れる。プラウザを立ち上げ「14歳 平均身長」と検索してみる。

「……156センチ」

幸子の身長は142センチである。

「やつぱり、ちっちゃいんですね、ボクは……」

クラスの女生徒で並んでも、前から数えたほうが遥かに早い。

幸子の脳裏に浮かぶのは、同い年のナターリアだ。彼女は、はるばるブラジルから夢を叶えるために、日本にやってきた。

そして、今は幸子と同じ学校に通い、奇しくもクラスメイトとなっている。頼る人も少ない中、ナターリアは幸子のことを慕っているし、幸子もそんな彼女のことが嫌いで

はない。

「ナターリアさんの身長はどのくらいでしたっけ？」

今度は事務所のホームページに飛ぶ。所属している大勢のアイドル達のプロフィールが見られる。それを見て仕事の依頼が来ることもあるのだから、侮れない。

「それにしても……たくさんいますね」

今は何人のアイドルが所属しているのか、幸子もよく知らない。みな仲が良く、居心地の良い事務所だが、こうして名前が並んでいるところを眺めると、それだけライバルが多いということでもあるのだと思い知る。

「えーと、ナターリアさんは……155センチですか。平均ですね。……それで、あのナイスバディとは」

幸子が気にする通り、ナターリアのそれはボン・キュッ・ボンだ。とても同じ14歳だとは思えない。さすがにクラスメイトの中でも抜きん出ているし、事務所の大人の女性たちと比べても遜色ない。

「でも、千早さんみたいな人もいますしね」

大先輩の名前をあげて、失礼なことを言う幸子であった。

しかし、如月千早はスタイルが決して良くななくても、抜群の歌唱力で絶大な人気を誇っている。

「ま、まあ、小さいのは仕方ないです。ボクはまだまだ、

これから大きくなる可能性を秘めているんですから」

現実を受け入れなければいけない。

問題は、プロデューサーの態度である。

「まったく、失礼なんですから……。ボクの未来を信じられないんでしょうか」

未来、と自分で口にしてから、ふと思いつく。

幸子がプロデューサーと初めて出会った時に言われた言葉だ。

『君の未来を、僕が信じる。他の誰も信じなくても、僕は信じるよ』

事務所に飛び込みで訪れ、たまたまその場に居合わせた彼に「ボクがアイドルになってあげてもいいですよ」と話しかけた。

それまでも、何件か他の事務所を先に当たったが、門前払いされてしまっていた。

やっぱり、この人たちも自分のカワイさが理解できないのかと、その時の担当者を不憫に思った。

初めて会ったプロデューサーは、若く、どこかひよろつとしていて、やや頼り無さそうな風貌だった。失敗したか

なあ、とも思ったが、幸子の話をひと通り聞いた後「分かった。じゃあ、頑張ろうか」と簡単に言うので、思わず、幸子の方が「本当にいいんですか？」と聞き返すほどだった。それに対する言葉が、先ほどのものだ。

ああ——この人は、嘲笑^{わら}わないでくれるんだ。

全身から力が抜けた。涙が出るほど嬉しかった。だから、彼についていこうと決めた。

「はずだったんですけどねえ」

今日の夕方の出来事を思い出すと、また腹立たしくなってくるが、昔のことを思い返して、少し冷静にもなる。

どうして、彼があんなことを言ったのか。もう少しゆっくりと話を聞くべきだったかも知れない。

意味もなく、幸子を否定するようなことを言う人ではないはずだ。

「……明日、また事務所に顔を出しますか」

今日、あんな帰り方をしてしまった手前、ちよつと恥ずかしいが、いつまでも引きずるわけにもいかない。

「し、仕方ありませんね。ボクの方から頭を下げてあげま

しょう。ボクは大人ですからね」

その後しばらくして、プロデューサーから電話がかかってくる。すぐに謝るのは癪^{しやく}に障るので、明日も学校帰りに事務所に寄ることだけを伝えて、電話を切った。

翌日。

その日は、小雨が朝から降っていた。傘を差しながら徒歩での登校は、どうしても気分が乗らない。学校が終わったら、どんな顔でプロデューサーに会ったら良いのか、そんなことを考えると、さらに憂鬱^{ゆううつ}な気持ちになる。

いくら仕事が忙しくても、学校にはちゃんと通うようにというのが事務所の方針だ。幸子もこれまで、学校を休んだことはない。足は自然と教室へと向かっていく。

クラスメイトにはナターリアがいる。彼女に声をかけてから、そこから少し離れた席に座り、一時間目の授業の用意をする。

「ねえねえ、輿水さん、これ知ってる？」

担任が来るまでには、まだ少し時間があるところに、ひ

とりの女子生徒が話しかけてくる。

あまり、親しい間柄ではない。

幸子の仕事のせいなのか、どうもクラスでは少し距離を置かれていることは、自分でも感じている。羨望と嫉妬の目など、あまり気にしなければ良いだけのことだ。

「なんですか？」

もちろん、話しかけられれば普通に対応するが。

「これ、ちょっと見てみてよ」

そう言って差し出されたのは、彼女のスマホだった。学校は持ち込み禁止のはずだが、わざわざそれを指摘することはない。

画面を見て欲しい、ということだろう。

言われるままに、視線をやる。

『輿水幸子に腹パンしたい』

目に入ったのは、そんな文字だ。

「……腹。パン？」

意味も分からず、そう呟くと、彼女は続けて、「これも見てみて」と画面を操作する。

「……………っ」

思わず、息が詰まる。

そこに表示されていたのは、幸子そっくりに描かれたイラストだ。ただの似顔絵ではない。

画面の中の自分は、服をはだけられ、お腹だけが露わになっている。白いはずの肌は、いくつもの青あざができ、顔は苦痛に歪んでいる。

その端には、ごつごつと一見して男のものだと分る拳だけが描かれている。

「腹パンっていうのは、お腹にパンチするっていう意味なんだって。輿水さんは腹パンしたいアイドル、ナンバーワンらしいよ」

これは——ただの、絵だ。

ここに描かれているのは——自分に似た別人だ。

そもそも、人ですらない——ただの記号だ。

誰も——殴られてなど、いない。

誰も——痛い目になど、遭っていない。

大丈夫。

ボクは——何もされていない。

頭では、理解している。

それでも、周りの音が急激に遠ざかる。

朝礼前のざわざわとしたクラスの喧騒が、何も聞こえなくなる。

「ねえ、輿水さんって小学校の頃は……」

すぐ傍で言葉を続けるクラスメイトの声も、耳に届かない。

届かないのに——鼓膜を、震わす。

意味は分からず——それは、ただの振動だ。

「……うつ」

自分のお腹に幻痛を覚える。それはすぐに実在のものとなって、全身に広がる。

耐えようのない悪寒が走り——。

「うろうう」

溢れ出す。

「ちよ、ちよっと、きたなっ」

幸子にスマホを見せた少女が叫ぶ。

そこに至り、クラスの他の者たちも異変に気づく。

「サチコ！」

腹を抱えて、教室の床にうずくまる幸子のもとに最初に

駆け寄ってきたのは、ナターリアだ。

「わ、私はただネットで見たから……」

口ごもるクラスメイトをよそ目に、ナターリアが幸子に声をかける。

「サチコ！ サチコ！」

床に広がる吐瀉物を気にせずに幸子の体を揺さぶる。

「……うう」

「気持ち悪いノカ？」

「……………」

幸子の顔色は真っ青で、明らかに血の気が引いている。

体は小刻みに震え、漏れ出る声は言葉になっていない。

「保健室へ！」

誰かが叫んだところへ、担任の教師が入ってきて、その場を取り仕切る。

幸子は、保健室のベットに寝かされることになった。

傍らには、ナターリアがついている。

養護教諭が体調不良だろうと言うので、担任は一旦、教室に戻った。

ちやんとご飯は食べているか。無理なダイエットをしていないか。仕事は忙しくないか。生理不順はないか。

幸子がアイドルだということも踏まえて、彼女は細かく

質問をする。

そのひとつひとつに、幸子は首を振ったり、頷いたりして答える。

その様子があまりに弱々しく、顔色が良くないこともあり、教諭は問診を打ち切つて、しばらく目を閉じて眠るようと言つた。

この時点で、幸子がひと言もしやべらなかつたことについて、まだ気にする者は、幸子自身を含めても、誰もいなかった。